

48期のユーモアあふれる面々

第48期 見市 信

我々48期の部員は平成元年4月に入学した面々である。その頃、運動部ではラグビー部、アメリカンフットボール部、野球部、サッカー部など数多くの部が活動していたが、その年ラグビー部の門を叩いたのは約15名、そして最後まで残ったのは7名である。

48期の面々は、安斎、榎木、後藤、塚原、見市、武藤、森本、そして2人のマネージャー井上、小松崎である。

48期の主将になった安斎は小学校の時からラグビーをやっていたので一年の時からレギュラーとなって活躍していた。初公式戦で初トライを挙げ、以後3年間で約30トライを数え、主将になってキッカーもするようになった。最後の秋の大会で、大事なゴールをはずし負けてしまった。部内、特に上級生の間の調和を重視し、主将としての彼の誇りは、夏休みにもかかわらず上級生が練習を休まず参加してくれた、ということである。

48期の中で最もアグレッシブな男、榎木は、中学時代レスリングをやっていたことで、体を張ったプレーが数多く、その割にケガも少ない安定したプレーヤーでFWの中心人物であった。彼の初公式戦は彼が一年の時の新人戦であったが、ポジションはブロップ。上級生になるとNo.8としてFWを引っ張り、キックオフの切り込み隊長として役割を果たしていた。また部室の中では、彼の豪快さからか、彼の汚れたジャージが山となって放置されていた。

48期の中で最も長身であった後藤、通称“G”は3年間ロックとしてラインアウトの主として活躍した。彼も榎木同様一年時の新人戦でデビューし、以後、本人はBKを

希望したが結局FWで3年間をすごした。口数は少なかったが、役割はちゃんとこなす玄人好みのプレーヤーであった。

48期の中で時間のルーズな男、塚原は毎度集合時間に遅れていたが、“ワーリ”の一言で全てが解決していた。試合になると足が速くなり、ハーフ、センターとして2年時の春の大会から活躍した。3年の夏合宿中、鎖骨骨折に見舞われたが見事復帰を遂げ最後の秋の大会に間に合うことができた。

48期の中で最も心の優しい男、見市は3年間自分の名前がちゃんと載ったことがなく、見布、貝市と間違いつづけられた。彼のデビュー戦は2年時の秋の大会でこれは先輩宮近のケガにより獲得した機会であった。公式戦ではノートライであったが数々の練習試合ではウイング・フルバックとしていくつかのトライを挙げた。

48期の中で一番試合で燃えた男、武藤は、2年時の新人戦でデビューし、48期のラインアウトのスローワーとして活躍した。試合中、歯をグラグラにしながらも前へ出続けていた。新聞を配りながらの練習参加であったが、3年間やり通した。キレイ好きな彼はよく部室を掃除していた。

48期の中で最も小柄ながらも最も筋肉質な男、森本はタックルを得意として、一年時の秋の大会からリザーブとして千歳のジャージに袖を通していった。防御の要として信頼されていた。その他、機械にも強く、試合、その他、ビデオの作成を一手に引き受け、ダビング帝王とも一時期呼ばれていた。

48期を影ながら支えてくれた2人のマネージャー、井上、小松崎は、試合になるとお手製のレモンのハチミツ漬けなどを作り、部員から好評を博していた。井上は口数は少なかったが、笑顔で部員に対応し優しく見守り続けてくれた。小松崎は根っからの明るい性格故、雰囲気作りに一役買い、部員の身の回りの世話をし続けてくれた。

我々48期生は、部員7人、マネージャー2人であったが、高校時代の思い出に残るようなユーモアあふれる面々であった。

（ 第 48 期
同期生からのことば ）

在学中は“つらい”と思っていた部活動であったが、その分得るものも多くあった。そして今の自分があると思う。 安齋健太郎

先輩方、ならびに48期生の皆さん、お元気ですか。今度またお会いしましょう。 森本卓

卒業してからは、皆それぞれの道を歩んでいると思いますが、いつの日か皆で会えることを楽しみにしています。 見市信

高校の時を思い出すと、ラグビーのことが真っ先に思い浮かびます。今もラグビーをやりたいと度々考えています。 椋原照久

高校時代は、練習が厳しく、何度かやめたいと思ったが、今思えばすばらしい思い出もあるし、すばらしい体験でもあった。 後藤東彦

みんなが一生懸命汗を流してプレーする姿を見るのが好きでした。いまでもあの雨の合宿での雄姿は忘れられません。 井上美紀